

2月3日(土) 放送分 自由課題番組

花になるらん…明治おんな繁盛記

世界に日本の美を商った女・ががはんの心意気

作家 玉岡 かおる

「京都で『前の戦争』というと応仁の乱をさす」なんて言いますが、幕末の「蛤御門の変」を忘れてはいけません。長州藩と薩摩藩の争いに端を発し、市街地の七割が焼かれた大惨事。市民の命も文化財も、あらゆるものが無に帰し、この時燃えた祇園祭の大船鉾は百四十年の時を経てやっと復興したほごでした。

さらにそのあと東京遷都で、京は行政機能も失ってしまいました。すから、明治初期の衰退ぶりは目を覆うほどだったでしょう。けれども瓦礫から煙くすぶる街で、いち早く自力復興をあげた店がありました。着の身着のまま命ひとつで逃げた市民が生きたために必要な衣類を扱った高倉屋がそれです。

父が創業した呉服屋の娘として生まれた雅は幼い頃から行動的な娘で、あだ名も「ががはん」。婿を迎え二代目の女房として、焼け跡の京で商売をもり立てていきます。

とはいえ、今までの京の産業の一大消費者であった天皇家を始め、公家や、それらに仕える人々がごそと東京へ行ってしまい、空っぽ同然になった京。しかも文明開化の風潮で日本人が洋服を着るようになってしまえば、それまで京が担ってきた美

的産業も一気に衰退。高度な技術者たちも失業です。

さて皆さんならこのピンチ、どう切り抜けますか？

「ががはん」こと雅に起死回生のヒントを与えたのは、開港されて海外への玄関となった神戸でした。先進の文明国が集まってくるこの街に突破口があったのです。雅は世界を相手に、神戸港から日本にしか作れない品を送りだして貿易を始めます。

折しもヨーロッパ各地で万国博覧会が開催されており、高倉屋は日本の看板を背負って、よきもの、美しいものだけを展示し、世界を驚かすのです。長い伝統文化が培った染めや織り、刺繍。日本人にしかできない超絶技巧の品は、やがて東京へ去った天皇家からも注文が入ります。みごと「御用達」となった高倉屋は、商いで勤王の志を果たしたのでした。

この後、高倉屋の発展は雅の息子たちの代で大輪の花を開かせることになりましたが、その礎を築いた彼女の心意気は、きつと勇気を与えてくれるに違いありません。

講師略歴・玉岡 かおる(たまおか かおる)

作家。兵庫県三木市生まれ。神戸女学院大学卒業。

1987年 神戸文学賞受賞作の『夢食い魚のブルー・グッドバイ』(新潮社)で文壇デビュー。話題作『お家さん』(新潮社)で第25回織田作之助賞を受賞。代表作は『銀のみち一条』(新潮社)、『虹、つどうべし 別所一族ご無念御留』(幻冬舎)、『天平の女帝 孝謙称徳』(新潮社)など多数。大阪芸術大学教授。兵庫県教育委員。